

心に残る文化財子ども塾 松江市立持田小学校

1. 活動の概要

6/18(水)、松江市立持田小学校の6年生 39 名とともに、薄井原古墳見学の授業を行いました。当日は、学校からバスを利用しながら、徒歩で古墳のある丘陵上まで登り、二つの横穴式石室の内部を見学しました。

薄井原古墳は全長約 50mの前方後方墳で、二つの横穴式石室の内部が見学できます。うち1基の石室内には、家形石棺が復元されており、石室石棺とも京都の古墳とそっくりなことがわかっています。発掘調査により土器や太刀などが出土していますが、県立博物館で保管されており、今回は別の遺跡出土土器や、太刀などの実物大写真パネルで説明を行いました。

児童たちは、身近な場所に沢山の古墳があることがわかり、とくに今回見学した薄井原古墳が県内屈指の大きさと、小学校の校舎とほぼ同じ大きさであることに驚いていました。墳丘の上を歩いている際に、土器の破片を発見したところ、みんな驚いていました。この「本物の土器が実際に本物の古墳に落ちている」ことは、児童にとって最も興奮した出来事だったかもしれません。

石室内はひんやりとし、虫(カマドウマ)を怖がりながらも、興味深く見学している児童が多かったように感じます。とくに石室は小さな板石をたくさん積んで、天井はアーチ形に組むなど、「どうして1500年も持ちこたえたのだろうか」といった意見がとても多かったです。

古墳の見学が終わると、近くの日陰で遺物や古墳に葬られた豪族の話をしました。場所の制約上、配布資料や写真パネルで説明を行いました。やその後に訪れた八雲立つ風土記の丘では、展示学習館と岡田山1号墳、復元竪穴住居を見学しました。解説ののち自由見学をしましたが、普段見ることがない埴輪や珍しい出土遺物に、児童たちは目を輝かせていました。岡田山1号墳では石室の中に実際に入る体験を行いました。石室の中はひんやりとして少し怯える児童もいましたが、懐中電灯で照らしながら奥までよく観察をしている様子でした。復元竪穴住居には何人入れるか児童が挑戦するなどして、竪穴住居の広さを体感していました。

見学後、八雲立つ風土記の丘で児童から感想、質問などをしてもらった時間を設けました。「昔の人はすごい技術を持っていたことが分かった。」など、意欲的な感想を聞くことができました。

2. 活動の様子

※申し訳ありませんが、撮影写真が失われてしまいました。活動の様子は、同じ古墳見学を実施した松江市立本庄小学校の記録を参照願います。

3. 子ども塾を終えて

1)児童の皆さんから…

- 町内にも古墳がたくさんあることを知った。全部行ってみたい。
- 古墳は持田小学校の校舎と同じくらいの大きさだと知って驚いた。
- 1500 年も前の石室なのに、壁や天井が崩れずに残っていた。
- 石室の壁は石をうまく積み上げられており、当時の技術に驚いた。
- (こんな立派な)石棺を作った人はどんな人だったか知りたい。
- ほかの古墳についても、どんな作りになっているのか知りたい。
- 古墳の上に(本物の)土器のかけらが落ちていて驚いた。
- 自分でも古墳の発掘がしてみたい。
- これから持田小学校に入る人など、みんながいつまでも古墳を見られるようにするには、どうすべきか考えた。

2)担任の先生から…

- 身近なところに貴重な古墳があることを知ることができ、実際にふれることができてよかった。
- 古墳の説明も興味をもって聞いていました。
- 猛暑でしたが、土器ふれあいコーナーなど、もう少し体験に時間が使えたのかなと思いました。

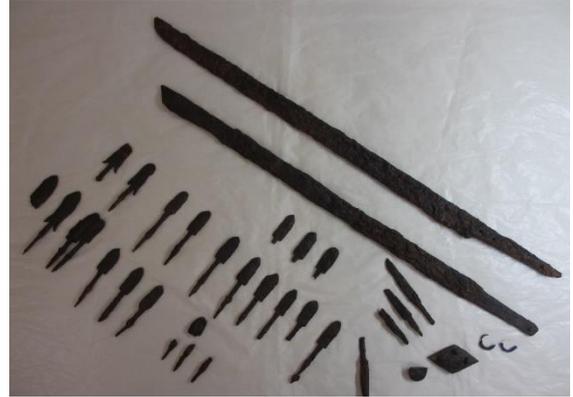
3)埋文センターから

6月中旬でしたが、猛暑を前提に古墳見学を行いました。古墳の石室内はひんやりと涼しかったのですが、道中は暑く、ハチとかヘビなども出る時期なので、古墳見学は(可能ならば)晩秋か初冬頃をお勧めしたいと思っています。それと、今回は古墳の土地所有者さんがとても協力的で、見学ルートの手刈りや、遺物の見学場所の提供など、いたせり、つくせりの対応をしてもらい、感謝感激でした。児童のひとりの感想「みんながいつまでも見学ができるようにするにはどうしたらよいか、考えました。」には、この事業だけでなく、古墳の関係者すべての協力が必要であることを、あらためて感じました。

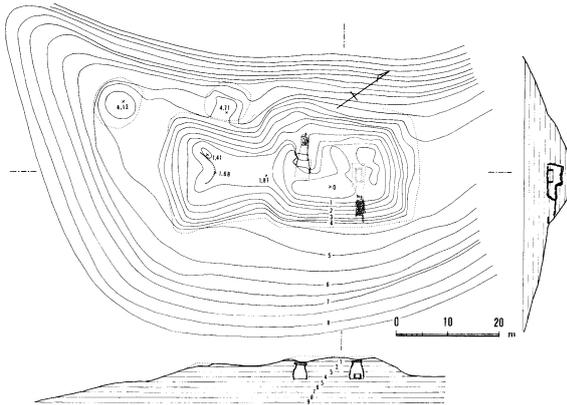
4. 参考資料



薄井原古墳出土土器(パネル)



同 鉄製品(実物大パネル使用)



薄井原古墳 測量図